
名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン最終回〜蘭に俺の本当の声で本当の言葉で〜

【Nコード】

N4458Y

【作者名】

落ちぶれた天使

【あらすじ】

事務所で暇していたコナン。

そこに1本の電話がかかってくる。

プロローグ

プロローグ

俺は高校生探偵工藤新一。迷宮なしの名探偵。そんな俺があるひ幼馴染で同級生の毛利蘭と遊園地にあそびにいったって、黒ずくめの男たちの怪しい取引現場をもくげきした。取引を見るのに夢中になっていたおれは背後からちかずいてくるやつらのもうひとりのなかまにきずかなかった。俺はその男にどくやくを飲まされ、目がさめたら体がちじんでしまっていた。組織に工藤新一が生きていると知れたら、また命をねらわれまわりの人間にも危害がおよぶ。はかせの助言でおれは正体をかくすことにし、江戸川コナンとしてらんの家にくるがりこんだ。

そして、いまだ組織のしつぽはつかめず、この体になってしまったからもう半年ほどたつ。

「あーあ。あいかかわらず依頼がこねえじむしよだぜ。」

コナンが暇そうな顔をしてつぶやいた。いま蘭は園子とスキー旅行。おっちゃんはおさから麻雀をしにいった。

ブルブルル

「ん？電話」

ブログ（後書き）

はじめまして。落ちぶれた天使です。今回初投稿です。まだすつこく未熟で下手ですけどよんでくれたらうれしいです。これからもがんばります。

一本の電話（前書き）

こんばんわw

一本の電話

電話だ・・・。

コナン八受話器をとってうけこたえた。

歩美からだった。

どうやらいまいる銀行が強盗にあっているという。

こなんはすぐかけつけ

見事事件をかいけつした。

テレビ局のインタビューをつけているとき

灰原はうっかりフードをかぶるのをわすれていた。

ジンにみられているともしらずに・・・

じんはにかつと笑うと、

あがさていにむかった

そう、さりげない一本の電話のせいで・・・

そのさりげない一本のでんわのせいで

新一のうんめいの歯車がまわりだす・・・

一本の電話（後書き）

でわまた次回

心の病気(前書き)

こんばんわーw

今日、2回目のとうじです かけるだけこれからもかきまーす

心の病気

雪がちらちらふるなか、灰原哀はいまの家、つまりあがさ亭にむかっていた。

哀は時計をみると、

『19時32分・・・銀行強盗にあってからそろそろ2じかん半・・・』

と、心の中でささやいた。

しばらく歩いているうちにあがさ亭がみえてきた。

門をあけて家の中に入ろうとすると、うしろから車のはしってくる音がした。

哀は、ふりかえったとき、その場でうごけなくなった。

そう、そこにはジンのポルシェがとまっていたのである・・・。

逃げようとしたときにはもうおそかった。

後ろから、睡眠薬をかがされ、

哀はその場できをうしなってしまった。

たまたまそこに歩美があがさ博士に探偵バッジの電池がきれたので

わたそうとしてとおりかかった。

歩美はやつらにみつかるまえにみをかくした。

そこで、哀がポルシェにのせられつれさられる所を

心臓がとまってしまいそうな思い出みしていた。

哀がつれさられたあと、

歩美は、コナンの家にいそいだ。

大粒の涙をぼろぼろこぼしながら、

ただ、ひたすらはしった。

大切な、

友達を、

大好きでしかたない人に

助け出してもらいたくて……。

探偵事務所の前にやってきたときは、

もう

涙のせいで、頬がまっかにはれていた。

それでも歩美は友をたすけたいただ一心で、

探偵事務所の階段をかけあがった。

そしておもいきりドアをあけた。

ちょうどそこにはコナンと蘭がいた。

コナンと蘭はおどろいて、

ただ、ひたすら大粒の涙をながしていた歩美に

「どうしたの!？」

「なにがあつたんだ歩美ちゃん！」

と、叫ぶようにいった。

歩美はどうにか事情を伝えようとしたが、

寒さのせいで体はふるえ、

なっていたせいでほおが腫れて

なにも言葉に発せなかった。

ただひたすらなくだけ・・・。

歩美がしゃべりたくても、

しゃべれないのを

蘭はみこして、

あゆみをまかにまねきいれ

肩に毛布をかけ、

涙をふき

あたたかいココアをだした。

10分ほどたってやっとしゃべれるようになった。

そしてあらためコナンが

「なにがあったんだ？」

とたずねるとさっき目撃したことを、

あゆみははなしでした。

歩美がはなしおわると、

蘭はおおいそぎで警察に連絡し、

コナンはFBIのジョディ先生にれんらくした。

それからジョディ先生が毛利探偵事務所に到着すると

コナンはジョディの車に乗り込んだ

「留守番なんてしてられない。歩美もいく！」

「だめだよ。歩美ちゃん。きけんすぎる！」

「でも、哀ちゃん、哀ちゃんは私の友達だもん！」

ひっしさがつたわってくるこの言葉をきいてコナンはにっこり笑うと

「しゃーねーなー。つれてってやるよ。でもついたら歩美は車の中にいんだぞ。」

ついにコナンも歩美のひっしさにみかねてOKした。

「っんー！」

話がまとまると、コナンと歩美はジョディの車にのりこんだ。

「ジョディ先生。灰原のねーさんが殺された倉庫にいつて。あそこがあやしいとおもうんだ。」

コナンは運転席にのりだしていった。

「OK。いいわ。それとその子と、あの茶髪の少女。ちゃんとまもってあげるのよ。」

ジヨディはいいおわるとにっこりわらってくるまをだした。

それにたいしてコナンは、しんけんなひょうじょうで

「うん。もちろん。」

といった。

「灰原哀がいるところ」
「えっ？」

哀が目をおさました。

『どいよにに・・・？』

哀が起き上がった。そしてふとさっき起こったことを思い出した。

『そう・・・そしきに変なくすりをかがされて・・・』

それからジンの不気味な笑みをおもいだした。

そのとたん、哀は体をふるわせて、ぎゅっと体をすぼめた。

あとでおもいかえしてみると、

気が気じゃなかった。

いずれここにジンがきて殺される・・・

『わかってたのにね。組織をぬけたじてんでこれくらい・・・わか
ってたのに・・・』

哀の頬から一粒の大きな水滴がポロリとおちた。

今までのつらさがどんどんおおきなみずのつぶになっておちていく。

お姉ちゃん

みんな

工藤君・・・

『私のせいでみんな殺されちゃう・・・』

そのとき哀は心がすっからかんになった。

自分ではいままで必死にクールにみせていたけれど

私には、むりね・・・

心の病気（後書き）

こんばんわ〜^^

今回は歩美も哀ちゃんも

とても切ない気持ちになるはなしです^^

最後の哀ちゃんの言葉は、

哀ちゃんの悲しい心のさけびってことで切なくかきました^^

次回はまた哀ちゃんの話です^^

灰原哀心身ともへの救出（前書き）

こんばんわーwまたまた投稿

今日は徹夜でかこーと思いますw

でわいってみよー

灰原哀心身ともにの救出

「ついたわよ。」

ジヨディがふるびた倉庫の前で車をとめた。

「ありがとう。ジヨディ先生。」

コナンが「そういったとたん、ケータイがなった。

「あ、電話……。」

コナンはケータイの通話ボタンをおした。

「もしもし。」

コナンがそうこたえると、ケータイから哀の声がきこえてきた。

「く、工藤くん？」

コナンはどなりちらすくらい大きなこえで

「は、灰原か!？」

と、2秒もたたないうちにこたえた。

それにたいして哀はおちついたようすで、

「ええ。いま、おねえちゃんがころされたそうこの2階に監禁されてるわ。まどからは木が見える……。」

哀はひっそりに冷静をよそおった。

心のなかでは恐怖でいっぱいなのをおさえて。

コナンは落ち着いた声になり

「そうか、いまたすけてやっからまってる。」

といい返事もまたずに電話をきった。

それからコナンはきくのぼると

倉庫の窓をのぞきこんだ。

哀がいることを確認すると、窓をあけるとつたえ

中にはいった。

「大丈夫か？」

コナンは哀をみてたずねた。

哀はしたをむいたまま

「ええ。」

とこたえた。

それからコナンは哀をせおってジヨディの車にもどった。

いま組織と鉢合わせにまるのは危険とコナンとジョディが

判断したため、そのまま、倉庫をあとにし、毛利探偵事務所にもどり、

あゆみもふくめ、哀は探偵事務所にはばらくねとまりすることになった。

あゆみももしかしたらやつらに顔を見られていたかもしれないので、

とりあえずコナンのそばにつくことになったのだ。

学校は探偵事務所からかよつことになり

歩美の母には、長期間の合宿とつたえられた。

く組織のやつらがいる倉庫く

さつき、コナンたちがあとにした倉庫のかんきんべやのまえには

ジンがたっていた。

「またきえやがったな。シエリー。」

と不適なえみをつかべじんがタバコをふかしている。

「ちっ。どうしやす？あにき。あの女には、例の薬を完成させてもらわなくちゃならねえんですぜ。」

ウォツカがこわばった表情でいった。

「まあそのうちもどってくるさ。あいつのまわりの誰かを殺すっておどせばやつは簡単にこっちにくる。」

ジンがいった。

するとウォツカがにやりと笑みをつかべた。

〈毛利探偵事務所〉

「だいじょうぶ？さむかったでしょう？」

蘭が3人の肩にもうふをかけ、あたたかいココアをいれた。

歩美はにっこり笑い

「うん！でももう大丈夫だよ」

と、いつもどおりのかわいらしい顔でいった。

一方、哀はうんともすんともいわず、ココアを飲んでいた。

蘭にはどうも、この顔が、とてもかなしげにおもえた。

なにかもすっからかんになってしまったような、悲しい顔。

そして、一番感じたのは、

苦しみや悲しみを全部じぶんでせおいこんでいるような顔であること……。

灰原哀心身ともへの救出（後書き）

えっとへんなとこでおわってすみませんーw

まってるから(前書き)

すいませんつまえのかいとちゅうでおわっちゃったんでさいしよらへんこのまえのつづきかきます。

まってるから

蘭はついに口を開いた。

そしてその優しい目は哀のことをやさしくつつみこんだ。

「なにかあつたの？哀ちゃん。」

哀は驚いた様子で

「え？」

と返した。

それから蘭は優しく笑うと、哀をだきしめ、

「大丈夫よ。哀ちゃんはみんなに必要とされてるわ。この世にいらなくなっただけの人なんていないんだもの。たとえそれがどんな人でも・・・人は、神様がくれた、ひとつひとつなかがみがちがう宝箱。宝物なんだから。」

蘭の優しく、純粋なその心にふれ哀は、姉の宮野明美のことを思い出した。

哀はすこしだけやさしく微笑んだ。

それから蘭のほづをむくと、

「あなた、いい母親になれるんじゃない。」

とほえみながらいった。

それをみていたコナンも、やさしく微笑んでいた。

くまってるから〜

5月1日

歩美のかわいらしい声が毛利探偵事務所にひびきわたった。

「蘭おねーさん、おじさん。学校いってきまーす。」

「いつてらっしやーい。」

蘭もにっこりしてコナン達にてをふった。

3人は探偵事務所をでると学校にむかって歩き出した。

学校について教室に入ると、それぞれ自分の席にむかった。

ふつーに授業をつけると、もう下校時間だった。

今日はなにもないのでたったといえにかえった。歩美は蘭と買い物にでかけていて

哀は散歩。

おっちゃんは浮気調査でふざいだった。

しばらくすると、おっちゃん、蘭と歩美がかえってきた。

「ただどいつまでたっても家にもどらなかった。」

「コナンが哀のケータイに電話をすると」

「おうとうがあった。」

「今どこにいるんだ？」

「組織の倉庫よ。」

「なんでそんなところに？」

「散歩の途中、ジンにあってね、知り合いを殺されなくなかったら、組織にもどって薬の研究をすすめるって。それで、要求をのんだってわけ。」

「バカヤロオ！なんでそんな要求を！」

「私は、ただ要求をのんだんじゃないわ。とりあえず時間をつくっただけ。あなたがここにくるまで
きながにまってるから。たのんだわよ。じゃあ。」

そついいのこすと哀はいっぱうてきに電話をきってしまった。

コナンはしばらくかんがえこむと、

「まってるよー！」

というとけーたいをおいた。

まってるから(後書き)

このやつはちょっとつまんないかも・・・でもまあかんべんしてく
ださい>>
<

やじやじるの？ (前書き)

こんばんわーwさあいつてみよーw

アジアンなの？

5月2日

いま、蘭はコナンの追跡めがねをコナンが寝ている間に、もちだし、バッチの発信機をたよりに、

いつまでたってもどらない、哀をさがしていた。

ついに蘭は哀がいる、倉庫にやってきた。

「じ、ここに哀ちゃんがいるのね・・・」

そのつぶやくと、つぶしをぎゅっとにぎりしめた。

そのとき鈍いおとがして、蘭は、きゅうに気が遠くなった。

そしてそのばできをうしなってしまうた。

そのすぐ後ろには鉄パイプをもったウォッカと煙草をふかしている、ジンがいた。

『新一、新一!』

蘭が太目をさました。

「どうよ!どう?」

そこはどこかの森のなかのようだった。

「どーして私がこんなところに?」

そのとき頭に激痛がはしった。

「いたっ
」

園激痛でさっきおこったことを蘭はすべて思い出した。

「そっか。私あのときうつしろからなぐられて……。とどにかく
このことをお父さんにっ。」

そういうと蘭はケータイをとりだし事務所にでんわをかけた。

でたのはコナンだった。

「どーしたの。らんねーちゃん。」

「あ、あのね、哀ちゃんが麻になってももどらないからしんぱいになって、コナンくんの追跡メガネで哀ちゃんを、さがしてたの。」

「え!？」

「それでね。急にうしろからなぐられて私、きをうしなっちゃって・
」

「それでいまどこにいるの!？」

「どこかのもりよ。でも、どこだかは・・・。」

「だいじょーぶ。ケータイのじーぴーえすですぐそっちにおじさん
といくから。じゃあまってね。」

「ええ。」

そういつと電話が切れた。

そのときふと蘭はおもった。

新一、新一なら哀ちゃんも私もかんとんに・・・

簡単に、

たすけてくれるのに・・・

どっ、どっいつちやったのよ・・・！

新一・・・！

本当に、あなたはいまどこにいるの？

なにをして、

何を食べ、

わらってるの？

そして、

もう、会えないの？

あなたはいきてるの？

あなたは私がいなくてさびしい？

私はさびしいよ。

ないでもないも

とてもおさえきれないくらいに・・・

新・・・

私はあなたのこと大好きだよ・・・？

あなたのことは

忘れられない。

ぜったいに・・・。

まってるからね・・・

まってる・・・

まってるよ・・・

蘭が静かにめをとじた・・・。

やじだいるの？（後書き）

このはなしは蘭ちゃんの苦しみがつたわってくるようかきました。
これからもがんばろーとおもいますwでわw

灰原心（前書き）

こんばんわんWさっそくいってみまーすW

灰原心

「蘭ねーちゃん。蘭ねーちゃん。」

「え?」

「やっと目がさめたんだね。よかった。僕お医者さんよんでくるー」

「え、コナンくん。」

そういって、コナンは病室をでていった。

どうやらここは病院みたい・・・

蘭はまだきりきりと傷む頭をおさえおきあがった。

「いたッ。私、いつのまにかねちゃったみたい。」

コナンが医者をつれふたたび病室にはいつてきた。

「もう大丈夫でしょう。これなら、明日には退院できますよ。」

医者が言った言葉に小五郎は目の色をかえ

「らん。本当によかったっ！」

とらんにだきついた。

コナンもほっとした様子で、蘭をみていた。

くそのころ哀はく

こんなくらくてケータイとパソコンと食料と実験道具しかないなんて

いやね。

たまにかかってくるジンからの電話は、

薬の開発をいそげってことばっか。

工藤くんもぜんぜん電話してこないところを見ると

まだなにもしてんしてないのね・・・。

たく、あのホームズ気取りの名探偵さんはいつたいなにやってんのよ・・・。

はやくてがかりつかんでこんなうすつきみわるいところから

開放してよね。

たく・・・。

灰原心（後書き）

きょうみじかくてすいませんっ

つぎながかくんで。でわw

正体（前書き）

今回もいつてみよーW

正体

学校の帰り道・・・

「おい、今日、博士んちでげーむやるっぜ。」

元太がにこにこしながらいった。

それにたいしてみつひこと歩美もにっこりしながら

「いいですね〜」

「やるやる〜」

といった。

よこでコナンもやさしくわらいながらみまもっていた。

ピリピリリ・・・

コナンのケータイがなった。

ジヨディ先生からだった。

コナンはケータイの通話ボタンをおすと、

「どうしたの？」

ときいた。

「ちょうど授業がおわったころかしら？」

「うん。で、どうしたの？」

「ちょっとクールキッドに話したいことがあってね。今、あがささんの家にいるからきてくれる？」

「いいんだけど、あいつらもいっしょでいい？歩美ちゃんは帰るばしょがいっしょだし、あいつら、いまから博士んちでゲームやるっ

てはっしやいでて。」

「いいわ。かえったら、研究室にきてくれる？」

「わかった。じゃあまたあとでね。ジヨディ先生。」

コナンはそういつと電話をきった。

ジヨディと電話しているうちにもつアガサ博士んちのめのまえにきていた。

中に入ると、歩美たちは

「ゲームやるっつ。」

「やいば²やるっぜ。」

「みんなでやりましょう。」

とってゲームを شدした。

「ナンはらんどせるをおくと地下室におりていった。

あとからはかせもおりていった。

ちかしつのとびらをあけると、ジョディがまっていた。

「で、なにがあったの？組織のことなんでしょ。」

「ええ。まあ。昨日、水梨玲奈から電話があつてね。」

「どんな電話なんじゃ？」

「ジンが、ある死んだはずの人物をロンドンでみたつて。それで組織は今園人物をさがしてるつて。だからきをつけてつて。」

「まさかそのじんぶつつて……」

「高校生探偵の工藤新一よ。」

正体（後書き）

続く・・・

江戸川コナン誘拐事件

ジヨデイ「やっぱりそうだったのね。」

コナン「え？」

コナンが不思議そうにジヨデイにいった。

ジヨデイ「だって、どうかんがえたって、小学一年生の頭脳じゃないもの。私たちもこしてるし。」

コナン「へへへへへ・・・」

コナンがごまかすようにわらった。

ジヨデイ「じゃあ私はかえるわね。みんなにこっそり護衛をつける準備をしなくちゃいけないから。」

「もちろん君にはわたしが・・・」

ジヨデイがそっぴいかけたとき、コナンは笑いながらいった。

コナン「ぼくはいいよ。」

ジヨディ「え、なんで!?! いちばん危険なのはクールキッド、あなたなのよ!」

コナン「護衛なんてつけたら、逆に正体ばれちゃうよ。」

ジヨディはすこし不満そうな顔をしてあがさ邸をでた。

それにつづき、コナン達も家をでた。

歩美「コナンくんバイバイ」

コナン「おっ」

そういつとコナンはひとりになった。

そのあとコナンは工藤邸にはいった。

コナン「とりあえず、掃除すっか。ずっと、俺の部屋とか掃除してねえし。」

そういうと、コナンは掃除機をかけはじめた。

「そのころ組織では」

ジン「工藤新一……。まだみつからねえか？」

ジンがウォッカにたずねた。

ウォッカ「へい……まだ……」

ウォッカがそういうとジンがたちあがった。

ジン「工藤邸だ。工藤邸にいくぞ。」

ジンがそういうと、ウォッカはにんまりとして車をだした。

ジンとウォッカがそこをでていくと、

隣のへやで、ききみみをたてていた、哀はうごけなくなった。

それから哀はケータイに震える手で、

今あった出来事を入力して、メールをおくった。

倉庫から工藤邸までは10分かからない。いまメールを打つのに、7分はかかってしまった。

―そのころ工藤邸では―

コナン「ん、メール？げ、灰原からだ。」

コナンはそういうと、ケータイをてにとり、メールをみた。

メールを見たとたん、コナンは青ざめて、まどのそとをみた。

ジンのポルシェがこっちにむかってはしってきている。

コナンはあせると、

コナン「やっべえ。」

とって、工藤ていをでて、スケボーをとばした。

もちろん、工藤邸から、スケボーを、あんな華麗にのりこなす、子供がでてくるのをみのがしはしない。

ジンは車でコナンを追いかけた。

ジン「小僧をうて！」

ジンがそういうと、ウォッカは窓から銃をだし、コナンをぞげきしようとした。

だが、コナンはそれを軽々かわした。

そのときだ。

コナンのスケボーの車輪がうたれた。

コナンは当然ころげおちた。

ジンの車のうしろから、

もう一台車がでてきて、窓からは銃をつきだしている。

そこから顔をのぞかせているのは、

キャンティだった。

コナンが落ちたのを見たジンは車をとめ、

コナンの肩をそげきした。

痛みでコナンはその場からうごけなかった。

ジン「きていたのか、キャンティ。」

キャンティ「ああ。」

その言葉を交わすと、ジンとウォッカはコナンにゆっくり近づいた。

コナンはまだ痛みでうごけなかった。

そこにやってきた二人はコナンの腹を足でつけた。

コナンは気を失った。

気を失ったコナンを見ながら、ジンがいった。

ジン「こいつを組織の地下の監禁部屋にぶち込んどけ。あとで、尋問しているいろはさせる。」

ウォツカ「へい。あにき。」

そういうと、ウォツカが車の後部座席にコナンをほつりこんだ。

ジンも車にもどろうとしたとき、

ジンは、じっとみつめるような視線をかんじた。

ふりむくと誰もいなかったのでジンは目的ははたせだし、まあよしとしようとして、くるまにのって

キャンティや、ウォッカとともに工藤邸のまえをはしりさった。

そのとき、視線をはなっていたのは、歩美達だった。

3人はもうぼろぼろ涙をながしていた。

歩美「コ、コナン君・・・」

光彦「と、とりあえず、け、警察に電話しましょう・・・。」

元太「お、おう・・・」

そういうと光彦はケータイをてにとって、震える手でボタンをおした。

警視庁「はい。こちら、警視庁司令部。」

光彦「あ、あの、めぐれ警部おねがいします。」

めぐれ「はい。めぐれ。」

光彦「め、めぐれ警部・・・」

めぐれ「おお。光彦君。どうしたんだい？」

光彦「じ、じつは、コ、コナン君が、銃でうたれて、ゆうかいされ
たんです！」

めぐれ「なにー？それは本当なのかねっ」

光彦「本当にきまつてるでしょう！」

めぐれ「で、君たちはいまどこにいるのかね？」

光彦「あがさ博士の家のまえです・・・」

めぐれ「わかった。すぐいくから君たちはあがささんの家でまって
なさい。」

光彦「はい・・・」

そういつと電話は「きれた。」

光彦たちはとぼとぼ泣きながらあがさ博士の家に入っていった。

江戸川コナン誘拐事件（後書き）

でわまた W

江戸川コナン誘拐事件？（前書き）

さあいってみよー

江戸川コナン誘拐事件？

ー15分後ー

ピンポーン

あがさ「はい」

めぐれ「子供たちは？」

あがさ「一応あったことは話してくれたたんじゃが、なきやまなくつてのお。」

佐藤「無理もないわ。目の前で友達が撃たれたんだから。」

そういつと、あがさ、めぐれ、高木、佐藤、白鳥は、歩美たちとこまでやってきた。

あがさ「ほね。けいぶさんたちがきてくれたぞ。」

げんた「めぐれ・・・警部」

めぐれ「なにがあったか、はなしてくれるかい？」

歩美「う、うん・・・。」

光彦「ぼくたち、とちゅうまで、かえったんですけど・・・。」

元太「おれが、はかせんちにわすれもんしちまったことおもいだしてよお・・・。」

歩美「それを、私たち、はかせんちにとりにいこうっておもって、はかせんちにもどろうとして、」

「はかせんちのまえのまがりかどまできたら」

光彦「コナンくんが黒い車においかけられてるみたいで怖い顔をして、スケボーをとばしてたんです・・・。」

元太「俺たち、ひかれそうになっちまってよう、でんちゅうばしらにくつついたんだよ。」

歩美「そしたら、その黒い車、まどから銃をだして、コナン君をう

千葉「けいぶー。ちょっといったところに、コナン君のスケボーがおちてました。」

そのスケボーは見事に車輪をうちぬかれていた。

めぐれ「かんしきいそげ！」

「私達は今日はこれで失礼します。子供たちもつかれているでしょうし……。では。」

そついうとめぐれたちはあがさ邸をでていった。

ーそのころのコナンー

コナン「ん、おれきぜつしてたのか？」

コナンがおきあがった。まだはらがきりきりいたんだ。

コナン「どこだ？どこ？」

どこか狭い地下室のようだった。その瞬間、コナンはそっきおっつたことをおもいだした。

体はさいわいしぼられていなかった。

ジン「おめざめか？工藤新一？」

うしろからジンのこえがした。

ふりむくとジンとウォッカがいた。

江戸川コナン誘拐事件？（後書き）

つづくのだ・・・w

江戸川コナン監禁事件（前書き）

タイトル、誘拐から、監禁にかわったぞよ

江戸川コナン監禁事件

コナン「ジン、ウオツカ!？」

コナンがおどろくようにいった。

コナン「クソツてことはここは組織の!？」

ジン「ご名答……。まさかガキの姿になっていきるとはな……」

コナン「灰原は？シエリーはどうした!？」

ジン「やつなら、違う倉庫でベルモットといる……。まあ、じきにここへくるだろうが……。」

コナン「で？俺をどうするつもりだ!？」

ジン「さあな……。まずはお前の身体検査からだ……。ウオツカ!」

ウォツカ「へい兄貴！」

そういつとウォツカはコナンの体を調べ始めた。

そしてケータイ2つと、探偵団バッチをコナンからうばった。

ジン「まあ、しばらくお前にはここでじっとしててもらおう。もうすぐベルモットとシェリーがここにくる。」

「それまで念仏でもとなえておくんだな。」

ジンがそういつと、ウォツカがコナンの体をきつくロープでしばった。

コナンをしばりあげたあと、2人は地下室をでていった。

江戸川コナン監禁事件（後書き）

やほーwアクセス数なう

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

アクセス数やばっwみなさんのおかげでぶ
これからもがんばるなう

江戸川コナン監禁事件？

―組織の地下室―

コナンはとりあえずベルモットをまつことにした。

地下室は狭くてくらく、灰原の気持ちがあつたきがした。

コナン「（おっせえなあ、ベルモットと灰原。あれ？でもなんで灰原までくるんだ？）」「

そんなことを考えているうちに、地下室の扉があいた。

ベルモットが入ってきた。

コナン「あれ、灰原は？」

ベルモット「シェリーなら上の研究室、ここにしかない、資料をみてるわ。」

コナン「だからあいつもきたのか……。」

ベルモット「私はあのコのみはりと、キャンティとコルンがかえってくるまでのただの見張り役よ?。」

コナン「キャンティとコルン? 奴等もここにくんのか!?。」

ベルモット「ええ。そうよ? 驚いた? 私のいとしのシルバブレックト君?。」

コナン「あいつらスナイパーだろ? なんで、俺のみはりなんかに?。」

ベルモット「いろいろあつてねえ。組織で人の手配がまにあつてないのよ。」

「それにあなたにいろいろ聞きたいことがあるみたいよ……?。」

コナン「聞きたいこと?。」

ベルモット「それとね、私がわざわざここにきたのにはもうひとつ理由があるわ……。」

コナン「理由?。」

ベルモット「ジンからの命令であなたなしでかすかわからないからって、睡眠薬をのませろっていわれてね。」

そういうとベルモットはポケットから麻酔薬をとりだしてコナンに麻酔薬をさしだしながら、

ベルモット「飲む？」

ときいた。とうぜん「なんも

コナン「んなもんのむわけねえだろ」

とかえした。

そのときベルモットがコナンのあごをつかみむりやり睡眠薬をコナンのくちにおしこんだ。

コナンがねむったのを確認すると、ベルモットはさっさといった。

江戸川コナン監禁事件？（後書き）

身じくくたすんませんなう・・・><

江戸川コナン監禁事件？（前書き）

昨日みじかくてすみませんなう！！！

今日はばりばりがんばるなう！！！

江戸川コナン監禁事件？

キャンティ「これがあの工藤新一？」

キャンティの声がきこえてきた。

コナンはゆっくりと目をあけた。

そこにはもうベルモットの姿はなくなかわりにキャンティとコロンがめんどくさそうにたっていた。

キャンティ「おめざめのようなね名探偵？」

コナン「キャンティ、コロン！」

キャンティ「あら、あたいらのこともけっこつつかんでるようだね
！」

コロン「おれ、狩りにいきたい・・・」

キャンティ「あなたはだまってな！！これもあの方の命令さ」

コロン「あの方・・・わかった・・・」

コナンはまだくらくらする頭をおさえながらおきあがった。

知らないうちにロープはきれていた。

キャンティ「さあはいてもらおうか、あんたの体がちじんだことを
知っている人物を？」

そういうとキャンティはコナンの頭に銃をおしつけた。

コナン「そんなやつ、いないさ」

コナンはあわてることもなく、平気な顔をしながら、こたえた。

それにキャンティはすこしばかりきれたらしく、

舌打ちするとコナンをけとばした。

それからコナンはいつさいこたえなかった。

おかげでけられたりなげとばされたり銃で足をかすめられたり全身ぼろぼろになった。

しばらくしてからキャンティは10分後またはなしをきくといってそとにでていった。

コナンはこのチャンスをのがしわしなかった。

へやにあったちいさな換気口からコナンはそとにでた。

コナン「ふーとりあえずだしゅつしたはいいけどこれからどうすんだ？」

「ケータイとられちまったし……。とりあえず交番にかけこむか！」

コナンはそういつとところどころいたむところをがまんしながら交番にやってきた。

―博士と少年探偵団―

ブルルブルルル

博士のうちの電話が鳴った。

少年探偵団はいつきに電話に注目した。

あがさ「もしもしあがさです。」

めぐれ「おおあがささん！コナンくんがほごされた。いま警察病院で手当をつけている。」

「悪いがすぐきてくれんか？」

あがさ「ほんとか！？よかったよかった。いますぐ子供たちをつれて病院にいきます！！！」

そついつと電話がきれた。

あがさ「みんな！！コナンくんがみつかったぞ！！」

歩美「ほんと！？」

光彦「ほんとですか!?!」

げんた「まじかよ!?!」

あがさ「ああ。いま警察病院で手当をつけているそうじゃ。きみらもいくかね?」

歩美「いくいく!?!」

光彦「いきます!?!」

げんた「いくにきまつてんだろ!?!」

そういつとあがさはかせたちは警察病院にやってきました。」

がらがら

病室のどあがひらいた。

歩美「コナンくん!?!」

光彦「ぶじだったんですね!？」

げんた「コナンく！」

コナン「おまえら!」

コナンは頭とかたに包帯をまいていた。

江戸川コナン監禁事件？（後書き）

今日もちょっとみじかい？なう！

疑い（前書き）

今日2回目なう

疑い

めぐれ「さっそくだがコナンくん。なにがあつたかはなしてくれるかね。」

コナン「うん。僕、つれさられたあと、変な工場の地下室にきずいたら監禁されてたんだ。」

「それで、誘拐犯がいなくなったときにちいさな換気口から脱出したんだ。」

めぐれ「歩美君たちが、君をつれさるさい、誘拐犯が尋問するとかいってたらしいが、」

「尋問されたのかい？」

コナン「あ、えと……だ、大丈夫！さ、されてないよ！へへへ……」

コナンは苦笑いをした。

そんなコナンを一同は啞然とした顔でみた。

コナン「え……？」

元太「コナン……おめえほんと嘘つくのへただな……」

コナン「え、う、嘘じゃないよ、やだなもう元太ったら……ははは」

光彦「幼稚園児がみたって一発でわかりますよ……嘘だって……」

歩美「コナンくん……」

佐藤「コナンくん。本当のことはなしてくれるかしら？」

コナン「あーいや、その……へへへ……」

高木「コナン君……」

コナン「う、嘘なんて僕がつくわけないじゃない？」

歩美「もうあきらめなよ」

元太「そうだぞコナン！」

佐藤「それとも、いえない理由でもあるのかしら……？」

コナン「え……」

高木「そうなのかい？コナンくん。」

光彦「そうなんですネ！」

コナン「な、何いってんだよ！みんなして！俺が！つ！つ！く！よ！つ！に！みえるか？！」

一同は声をそろえていった

『みえる……！！！！！！！！！！』

コナンはあきらめたようにため息をついた。

コナン「はあ……」

それからコナンは子供のような顔をするこ

コナン「はなさなくちゃ、だめ？」

ときいた。

また一同はこえをそろえてきつぱりと

『だぐめ！！！』

といった。

コナンはもう一度ため息をつくときさい声でいった。

コナン「されたよ？これだけじゃ・・・だめ？」

光彦「だめです！！！それだけじゃなんで誘拐犯がコナン君をさらったか分からないでしょう！！！」

佐藤「そうよ。コナン君、もっとくわしくおしえてくれるかしら。」

コナン「じ、実はわすれちゃったんだ！ほら、僕こどもだから！！」

また一同が啞然するなか、あがさはかせが苦笑いしながらコナンをかばった。

あがさ「ま、まあコナン君もつかれてることじゃろうし、事情聴取は、また今度ってことでどうじゃ！？」

めぐれ「そ、そうだな。じゃあまた後日事情聴取をしましょう。」

一応一同は納得したとみえたが、まだ納得していなかったものもいた。

佐藤「なんか、あのあわて方、なんかありそうじゃない？」

高木「はい……。ちょっとオーバーすぎますよね……。」

佐藤「ねえ、高木くん。コナン君の過去について、調べてくれない？」

「私は、コナン君の戸籍調べるから。」

佐藤「あ、はい！わかりました！」

そういうと二人は病室をでていった。

一方、少年探偵団もコナンのことをふしんにおもっていた。

歩美「ぜったい、コナン君、なにかあるよね！」

光彦「はい！なにかあるにちがいません！」

元太「でもそれをどーやってききだすんだよっ」

光彦「ぼくにいい方法があります！」

そういうと光彦はおもちゃの手錠をだした。

歩美「で、でも、それはちょっとコナン君があかわいそうよ。」

元太「でもよ。逆にあいつのためになんじゃねえか？」

光彦「そうですよー！」

歩美「そ、そうよね・・・！」

あがさ「君たち、かえるぞ。」

歩美「私達、もうちょっとコナン君とおはなししてくー！」

光彦「だから博士はさきにかえっててくださいー！」

あがさ「そうか。くらくなならないうちにかえるんじゃよ。」

そついとあがさは病室をでていった。

それと同時にめぐれも病室をでていった。

そしてびょうしつはコナンと少年探偵団だけになった。

すると光彦はコナンにかけよって

光彦「ごめんなさい！！！！」

とってコナンの片手におもちゃの手錠をかけもう片方をベットの
はしにくくりつけた。

コナン「ええ、ちょっと！！！！なに！！！」

とあわてた。

そしてもう片方の中には 元太と歩美がかけより

反対側のとて同じように手におもちゃの手錠をかけもう片方をべっ
とのはしにくくりつけた。

歩美「ごめんねコナン君！！！」

コナンは両手がふさがれた。おもちゃだからといって、そう簡単に
ははずれない。

コナン「お、おい！なんだよこれ！」

コナンははずそうとして手錠をひっぱった。

光彦「コナン君、本当のことをはなしてください！……！」

歩美「おねがいコナン君！……！」

げんた「おれら友達だろ！……！」

コナン「だからなにもかくしてないって。」

コナンはまだ手錠をはずそうとしながらいった。

歩美「おねがいだよコナン君……私達、コナン君のこと、しんぱいで……。」

光彦「灰原さんも、さらわれちゃいましたし……。」

げんた「おれら、友達がつぎつぎにさらわれて、心配なんだよ……。」

3人のめは涙ぐんでいた。

コナンはわらうと口を開いた。

コナン「わかった。はなしてやる。」

歩美「じゃあ!」

コナン「でもいまはまってくれねーか?」

光彦「え?」

コナン「時がきたら、お前らにはすべてはなしてやるから、その時までもうすこし、」

「まってくれねーか?」

コナンの意味ありげな言葉に、少年探偵団一同はにっこりし、

光彦「はい!」

歩美「うん！」

げんた「ぜつたいだぞ！」

とつぎつぎにいった。

それからコナンは苦笑いをするど、

コナン「それと、この手錠はずしてくれねーか？」

といった。

光彦たちはうなずくとコナンの手錠をはずした。

「そのころジンたちは」

ジン「ガキはどこにいった？」

ウォッカ「この換気口から、にげたみたいですねえにぎ。」

ジン「おもしろいじゃねーか。キャンティ、コルン、あのガキをすぐにつかまえてここにつれてこい！……！」

ジンがいった。

キャンティ「あいよ。」

コルン「つかまえる……分かった……。」

そういうと2人は勢いよくでていった。

―そのころの佐藤、高木―

佐藤「た、高木くん……。」

高木「はい、佐藤さん」

佐藤「ないのよ、コナン君の戸籍が……。」

高木「ええ！……じゃ、じゃあコナン君は、いったい何者なんだ！？」

佐藤「海外の戸籍もしらべたけど、江戸川コナンなんて人間、この世に存在しないわ!」

高木「僕のほうでも、コナン君のたんでいじむしょにあらわれるまでの過去をさぐってみたんですが、
いつさい、探偵事務所にあらわれるまで、目撃されてないんです!」

佐藤「いったいどうして!？」

高木「それと、コナン君が現れた日から、姿をけして、おとさたな
い人物がいるんです。」

佐藤「え?」

高木「工藤くんですよ!」

佐藤「まさか……。高木君!すぐにコナン君の指紋と工藤君の指紋をしようござうして!」

高木「え!？」

佐藤「はやく! ! ! ! !」

疑い（後書き）

今回おもしろくなかったなう・・・

佐藤と高木（前書き）

やほーwめちやめちや腹いたなうー!!!!

佐藤と高木

高木「はは・・・こんなことって・・・」

高木刑事はコナンの指紋と新一の指紋を照合した結果をみながら冷や汗をたらしていた。

高木「し、指紋が、い、一致してる・・・!?!」

佐藤「どうだった？高木君」

高木「そ、それが」

佐藤「一致したのね・・・まさかとは思ったけど・・・」

高木「はい・・・」

佐藤「でもどうしてあんな姿に？しかもどうして正体をかくしているのかしら・・・？」

高木「ですよね・・・」

佐藤「やっぱコナン君に直接きくしかないわね……」

ーそのころコナンはー

コナン「（しかしこれからどうすつかー？俺が気づいたらいなくなつてんだ。組織の奴等もこれこそ血眼になって俺をさがすだろーしな……それに、なんか佐藤刑事俺のことあやしんでたような気がするんだよなー。こりゃ、いろいろ大変になってきたなー……」

コナンはベッドに横たわりながらボーっとしていた。

次第にコナンはねむくなり、そのまま眠りについた。

ーそのころキャンティとコルンはー

キャンティ「たく、いったいあのガキどこにいったんだい？」

コルン「あいつの……家には……いなかった……」

キャンティ「となると病院だが、どうせいるとしたら警察病院だね・

「．．．となるとやつかいだよ。」
「近くにサツがいる可能性がたかいね．．．簡単につれだせないよ
」！」

「コルン」うん．．．．．とりあえず、ジンに．．．連絡．．．」

キャンティ「ああ。そうだね。」

佐藤と高木（後書き）

みじかっなう！！！

復活！東の名探偵（前書き）

やほーなう

復活！東の名探偵

ジン「やはり、家にはもどってないか・・・」

キャンティ「ああ。どうせ警察病院だろうよ。」

ジン「じゃあお前らとほかのメンバーであいつの家のまわりや通り
そうなどこをはっておけ。」

「けがといつてもあれはたいしたけがじゃねえ。すぐにでてくるだ
ろう」

キャンティ「あいよ。ジン」

「一方コナンの病室では」

いしゃ「うん、これだったら明日にでも退院できるでしょう」

蘭「ほんとですか！よかったねコナン君！」

コナン「うん！」

蘭「じゃあ明日の朝むかえにくるから、今日はお姉ちゃん、かえ
るね」

コナン「うん！」

そついうと蘭は病室をでていった。

コナンはそのまま考え込んだ。

コナン「(さてどーすつか・・・俺のみのまわりで奴等がはってか
もしれねーし、俺が退院したとわかつたらすぐ行動にでるだろーし・
・まったく、どーすりゃいいんだよ・・・ま、とりあえずあさっ
ての学校の帰りにでもはかせんちによつてくか・・・)」

コナンはかんがえているうちに深い眠りについた・・・。

ー翌日ー

コナン達はめでたく退院して探偵事務所にいた。

蘭「コナンくん、晩御飯なにがいい？」

コナン「なんでもいいよー」

コナンは必死に子供のようにふるまった。

それから1時間くらいすると、

晩御飯がでてきた。

蘭「明日はコナン君、学校だね」

コナン「うん」

蘭「また誘拐なんてされちゃだめよ？ちゃんとコナン君が帰ってこ
られるように、ある人たちにおねがひしたから」

コナン「ある、人たち？」

コナンは顔をしかめた。

蘭「少年探偵団のみんなよ」

コナン「え!？」

蘭「歩美ちゃんがね、コナン君が入院してるあいだに自分のうちにかえったじゃない?そのかえりぎわに、しばらく帰るときはコナン君をここまでおくりとどけてくれるって」

コナン「まじ!?!」

「(あいつら、余計」なことを)」

蘭「ほら、ご飯たべおわったらはやくねなさい、明日の準備してね」

コナン「はい」

コナンはそういつとリビングをでて布団にもぐった。

復活！東の名探偵（後書き）

うぶ

はりきった探偵団(前書き)

今日はさいしょのころげんためせんやねん

はりきった探偵団

じりりりり

目覚まし時計がはげしくなった。

コナン「朝か・・・」

コナンは眠そつな顔でおきあがる。

コナン「ふああああ。」

コナンはあくびをするとリビングにでていった。

コナン「おはよう、蘭ねーちゃん。」

蘭「おはよう、コナン君、ご飯にしようか。」

コナン「うん。」

小五郎「ふあああああ」

蘭「あ、お父さん、今日、空手部でおそくなるから、夜ご飯はポアロで食べてね〜」

小五郎「へいへい・・・」

蘭「コナン君も寄り道しないでかえってくるのよ。」

コナン「はい」

コナン達はもくもくと朝食を口にした。

それからコナンは家をでた。

歩美「おはよう、コナン君！」

光彦「おはようございます！」

元太「よう！コナン！」

コナン「よおおめえら。」

歩美「哀ちゃんもおはよう！」

哀「おはよう」

歩美「コナン君も蘭お姉さんからきいてるとおもっけど、」

光彦「しばらく僕たちが」

げんた「お前を家までおくってやんよ！なずけて・・・」

3にんそろって『コナン君をまもり隊！・・・！』

コナンは苦笑いをした

はりきった探偵団(後書き)

むふふ

不審者事件（前書き）

うわ

w
w
w

不審者事件

そうこうしているうちに、学校についていた。

女子一同『コナンくん!!!』

コナンが教室にはいると、クラスの女子が一気にコナンの元へ、かけよった。

女子A「元気にしてたあ？」

女子B「風邪？」

女子C「だいじょうぶ？」

女子D「ちょっと、みんなおさないですよ！私がコナン君とお話するのっ!!!」

女子E「私よ!!!」

女子F「あたしだもんっ!!!」

歩美「ちがうわ！コナン君は歩美の将来のお婿さんだもん!!!」

コナン「え、ちょっ!」

コナンの取り合いで扉が混雑した。

コナンは成績学校トップで、運動神経がよくてサッカーもプロ並み。

ってほうがただしいかしら？」

コナン「ベルモットが？んなことしたことばれたらあいつころされちまうだろ！？」

灰原「さあ？どうかしらね。彼女はあなたのこときにいつてるみただし。」

コナン「それよりお前、こんなとこにいてだいじょぶなのかよ？」

灰原「どうかしら？でもしいてゆうならより危険なのはあなたね。警察に親密な関係をもたない私とちがつて、あなたが警察と親密な関係であることは明白。となると私よりまずはあなたのことを組織は優先するでしょうから？せいぜい気をつけるのね。」

コナン「あ、ああ……。」

小林「は〜い。みんな授業はじめますよ〜。」

一同『は〜い』

コナン「（たく、こんな中じゃ考えられもしねえよ……）」

小林「小島く〜ん。3 + 8は？」

げんた「えつと、えつとねえ……10!?!」

小林「おしい〜!?!じゃあ円谷くんはとけるかな〜？」

光彦「もちろんです！答えは11です!?!?!」

小林「せいはいっ！」

放送「緊急放送、緊急放送、1階の図書室で水漏れ事故が発生しました。児童は教室と窓の鍵をしめ、担任の指示に従って行動しなさい。避難訓練ではありません。くりかえします・・・」

小林「みんな！教室のドアとまどをしめて！はやく！」

児童A「きゃー！」

光彦「確か、水漏れ事故って、不審者が侵入したって意味ですよね・・・？」

歩美「う、うそお・・・」

げんた「まじかよお・・・」

小林「みんな、おちついて！私のほうにきなさい！」

灰原「なんか大変なことになったわね・・・。」

コナン「ほんと。世の中事件がたえねーな！」

歩美「二人とも・・・」

光彦「おちつきすぎです・・・」

コナン「まあ銀行強盗やら何回かやりあってっから。それに、ガキのころこーゆーこと一回あったし。」

元太「ガキのころ？なにいつてんだオメー。」

光彦「いまだって、がきじゃないですか。」

歩美「うんうん。」

コナン「ま、まあいいじゃねーか・・・ははは」

灰原「まあ、とりあえず現場待機しかないわね」

東尾マリア「あ、ドアの向こうに変な人がおんで！」

小林「きつと例の不審者だわ！みんな、さがって！」

灰原「で、どうするの？」

コナン「キック力増強シューズはねえけど麻酔張りはあっからうちこむ」

そういうとコナンは不審者にちかずくと麻酔張りをうちこんだ。

不審者はそのままねむってしまった。

そこへ、警察が到着し、不審者はお縄についた。

はじまっちゃったね・・・

不審者騒ぎのせいでその日の学校はなくなった。

俺たち少年探偵団は歩美たちに無理やり？つき合わされ、博士の家で、こういう場合の対策を考えることになった。

今はその博士のうち。

もう日が暮れるころ。

5時半。

コナン「おい、オメーらそろそろかえったほうがいいんじゃないか？」

光彦「そうですね。もう日も暮れてきましたし。」

ピンポーン

光彦がそういいかけたときだった。

博士の家のチャイムがなった。

博士はだれじゃ？という顔をしながら玄関にむかった。

ドサッ

いやな音が玄関のほうからした。

それとどつじに、博士のうめき声も。

博士「うわっ!!!!」

コナン「博士!?!」

歩美「な、なにがあつたの?」

コナンは急いで玄関にむかった。

そこにはみたくもない光景がひろがっていた。

なぐられて気をうしなってる博士。

その目の前には拳銃をもったジンとウォッカ。

コナン「ジン……ウォッカ……」

哀「うそ……」

灰原はその場でしゃがみこんだ。

玄関に駆けつけた歩美や光彦やげんたもいい状況でないことはわかった。

光彦「は、かせ?」

げんた「だ、だれだよオメーら……?」

コナン「おめえらはさがってる!!」

コナンがさげんだ。

だが、歩美達はなぜか恐怖でうごけなかった。

そのときサイレンサーつきの拳銃が火花をちらした。

同時にコナンは足に激痛を感じた。

そのままコナンは倒れこんだ。

そう、コナンの足がジンが打った弾をあびたのだ。

弾は貫通したが、おぞましいほどに血がでてきて、身動きが取れない。

歩美「コナンくん!!!!!!」

歩美はそういつとコナンにかけよって、コナンに話しかけた。

歩美「だ、大丈夫?」

コナン「あ、ああ。これくらいじゃ死なねーよ・・・」

そついいながらもコナンは苦痛で眉をしかめる。

その後、げんたと光彦もコナンにかけよってジンたちに行った。

光彦「なんなんですか!?!あなたたち!?!いきなりうったりして!

!!」

ウオツカ「だまってそのメガネのガキとシェリーをわたせ!」

歩美「しえ、シェリー?」

げんた「だれだ?」

光彦「とにかく、コナン君は渡しません!!!」

ウオツカ「いまなら、そのガキを渡すだけでオメーらをみのがしてやるぜ?」

光彦「いやです!!!」

コナン「み、光彦、に、にげる!」

歩美「じゃあコナン君のかわりに歩美がいくからコナン君を病院につれてつて!」

ウオツカ「そんなのが聞けるとでもおもってんのかよ?」

そんな中、なきそうな顔をした探偵団たちとは裏腹に、

コナンはかくごをきめたような顔をした。

コナン「大丈夫。この人達俺の知ってる人だから。ついていけばなんもされねーよ。」

歩美「で、でも」

コナン「肩かしてくれればあるけっから。げんた、肩かしてくんねーか？」

コナンはつくり笑いをしながらいった。

光彦「く、車にのればいいんですね・・・？」

ジン「・・・ああ・・・」

光彦「じゃあ僕たちものります。それでいいですか？」

歩美「そうよ！あたしたちコナン君の友達だもん！」

げんた「そーだぞ！」

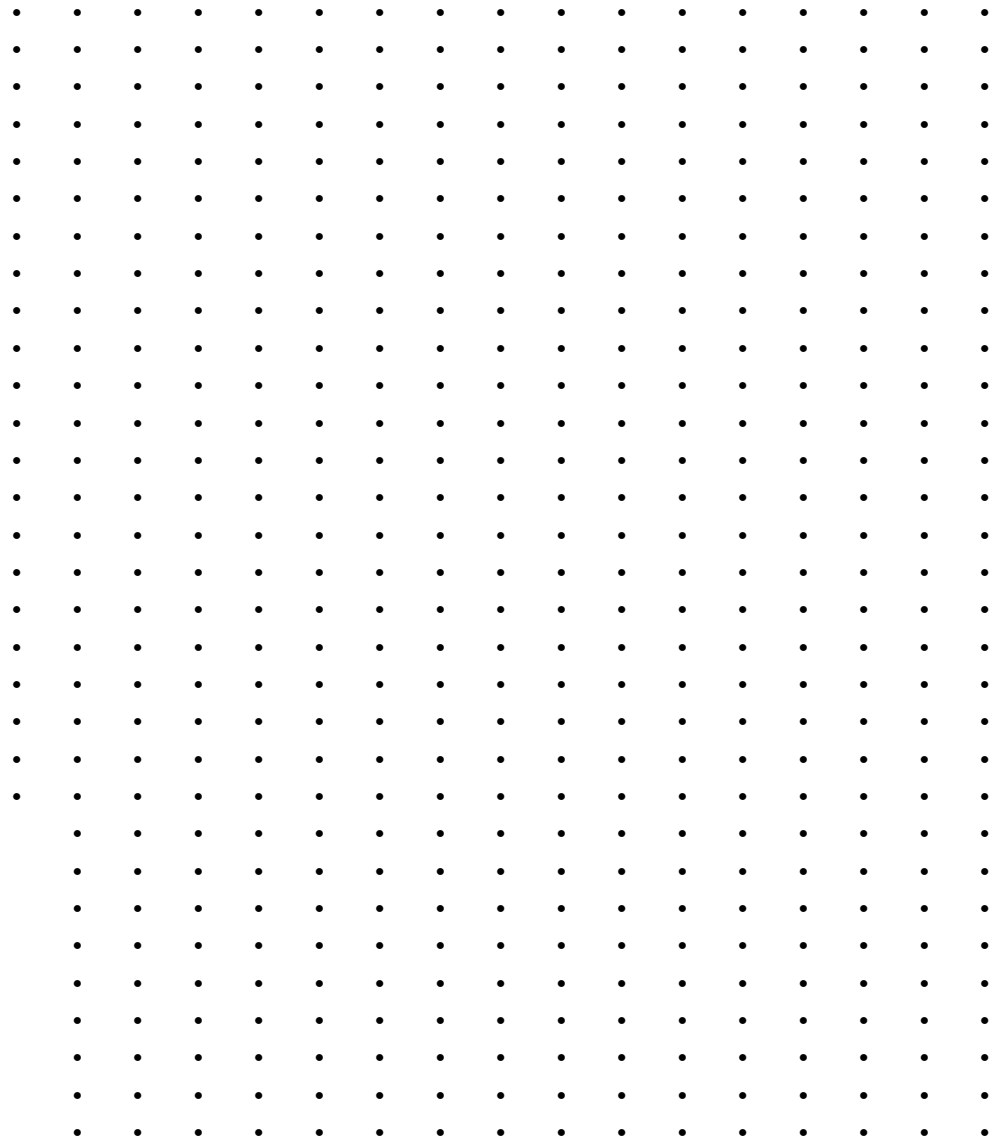
ウォッカ「ならばやくのれ！」

ウォッカがそついうと歩美達はぞろぞろとポルシェにのった。

さつきまではふるえがとまらなかった哀も、覚悟を気め、車内にはいっていった。

その後コナンもウォッカに無理やり体をおこさせられ、車の中には織り込まれた。

はじまちゃったね・・・(後書き)



しゃくしえんなによだあ

コナン達をのせたポルシェは今、どこかの車庫で停車していた。

光彦「大丈夫ですか・・・？コナン君・・・？」

コナン「ああ・・・。これくらい、ハアッしにやしねーよ、ハアッ」

哀「まるわかりよ。無理してるって。」

コナン「とにかく、今やつらがいねえすきに、どうにかしなくちゃならねえけど・・・。」

コナンはそれからおおきくため息をついて自分の体をみおろした。

その小さな体はロープで手足をきつく固定されていた。

もちろん他のメンバーも。

歩美「あたし達、死んじゃうのかなあ・・・。」

哀「今はまだ大丈夫よ。」

歩美「え？」

哀「江戸川君を殺さずつれてきた理由はひとつ。APT X 4869の大事な服用者だから。おそらく、江戸川君のデータなどを利用して私に完璧なAPT X 4869をつくらせるのがねらいだろーから。完成するまではあなた達は江戸川君と私が抵抗しないための保険。だから薬ができるまで大丈夫よ。あとは私ができるべく研究を遅くするから。あとは江戸川君がたえられるかどうかね。」

光彦「APT X 4869？」

げんた「なあんだそれ？」

歩美「コナン君がその薬を飲んだ？」

コナン「事情はあとで説明するよ。問題は脱出方。さいわい武器はあつから、奴等のめをぬすんでどうにかしてやるよ。」

光彦「わかりました！」

歩美「コナン君もよく分かんないけどがんばってね！」

げんた「たのんだぞ！」

コナン「ああ！」

哀「ジン達もどってきたわ！」

寝ちゃったらいやだ

光彦「とりあえずコナン君。応急処置するんで動かないでください。」

コナン「ああ。でもおめー包帯なんてもってんのか？」

光彦「大丈夫です！前にコナン君がおしえてくれたでしょう！タオルの。」

コナン「ああ、あれか。おぼえてたのか」

光彦「はい！あれからはさみとタオル、いつでももちあるようにしてたんです！」

そついうと光彦はコナンの足の撃たれたところを包帯でまいた。

光彦「できました！これでなんとか、歩くことぐらいはできます！」

コナン「サンきゅ・・・光彦」

光彦「いえ」

そのとき車が停車した。

古びたくらい山奥の屋敷だ。

どつやらここが目的地とみて間違いないだろう。

ウォッカ「おりろ。」

そういうとウォッカがドアをあけた。

ジンはすたすたと屋敷にはいつていった。

哀「なんだか薄気味の悪いところね・・・」

歩美「歩美、こわい・・・」

ウォッカ「ついて来い」

そういつとみんなで屋敷にはいつていった。

今は縄がほどかれていて体がらくだった。

あるいていくと、地下の実験室のようなところへやってきた。

そこにはふるぼけた長いすとパソコンと山済みの資料。小さな机とその上にあるパソコンがあった。

数人の組織の科学者らしい人物がいる。

もちろん、天井には監視カメラがあった。

科学者 a 「これが工藤新一ですか？すばらしい、あの薬、ぜひ研究したい。」

ジン「好きにしる。ただまずボスに命じられたことをしる。」

科学者 a 「はい。」

そういつと科学者らは部屋をでていった。

ジン「シェリーはここでa p t xの完全なものをつくれ。こいつを参考にな。」

ジンはそういつとコナンの服のフードをつかんでもちあげ部屋の片隅におもいきりなげすてた。

コナン「っ・・・!!」

歩美「コナン君！」

それからジンはひるんでるコナンにちかずくと、コナンの腹を思いっきり足でつけた。

コナン「うっ!!」

そのままコナンは気絶してしまった。

歩美達の悲鳴がなりひびいた。

哀「江戸川くん！」

歩美「いやああ！」

光彦「こなんくん！」

げんた「コナン！」

ジンはコナンを持ち上げると長いすの上に投げ捨てるようにおいた。

ジン「じゃあな。ちゃんとつくねよ。お前らはずっと監視されてんだからな・・・。」

そついうと二人はしずかに立ち去った。

二人がいなくなったのを確認すると4人はコナンにかけよった。

歩美「コナンくん〜おきて〜!!!」

3人はもう涙目だった。

コナンはよほど強い力でけられたのか目をさまさない。

寝ちやったらいやだ(後書き)

ふHぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

名探偵の睡眠（前書き）

ああああああああああああああああ

名探偵の睡眠

歩美「起きて、おきてよコナンくんくん！」

哀「だめ……資料が少なすぎる……」

歩美「うそ……」

光彦「それじゃ……」

げんた「まじかよ……」

コナン「んっ」

コナン「がゆっくり目をあけた。」

歩美「きがついたのね！コナン君！よかったあ！！」

コナン「ん、ああ。そうだったな……」

哀「資料がすくなくすぎて、薬ができないわ・・・」

コナン「へえ。」

哀「へえってあなた！」

コナン「薬よりもまず、ここから出る方法をかんがえろよ。」

光彦「そんなこといったって・・・」

げんた「まずオメー、少しは休めよ？かなりふかく弾はいつてんだろ？ねてるよ」

歩美「そうよ！」

光彦「その長いすで！」

哀「そうしなさい」

コナン「いいよねなくて。」

哀「いいから。ねなさいっていつてるのよ!」

コナン「んなこといったって大丈夫だよ!」

哀「そんなこといってると口ぶさぐわよ」

コナン「だからって眠る訳にはいかねえだろ」

哀「あら、ふさいでほしいのかしら? タオルならあるわよ? ロープも、しつかりね。それとちゃんど麻酔張りもあなたが気絶してるあいだにあずかっておいたから。」

コナン「お、おい! でもさすがに奴等の監視下でおねんねすんのはやべえだろ!？」

歩美「でも、足、さっきから我慢してるんでしょ!？」

光彦「灰原さんに協力します!!!」

げんた「おう!」

歩美「うん!!!」

哀「ありがとう。」

哀はそういうとロープを光彦の前にばいとなげた。

光彦はロープを手にもつとコナンのそばにげんたと歩美とかけよってコナンの両腕をつかんでむりやり抑えた。

コナン「おい!」

歩美「じっとして」

げんた「おい動くなよコナン!」

光彦「ぬっつっつ!」

コナン「おーい!!!」

哀「がまんしなさい。」

哀はタオルをもってコナンに歩み寄った。

コナンはもう両手を長いすに固定されていた。

コナンは長いすに座っている。

そのよこには探偵団がいてコナンをかこんでいる。

哀は真正面にコナンと向き合つと、タオルでコナンのくちをふさいだ。

コナン「ん〜!〜!〜!ん〜!〜!〜! (おい!っほどけ!〜)

哀「うるさいわね。ねなさいっていつてるのよ」

コナン「ん〜!〜!〜!ん〜!〜!〜! (だからやだって!〜!〜!〜!)

哀「しょうがないわね。麻酔銃うちこむわよ」

哀はそういつとコナンにますいじゅうをつちこんだ。

コナンはかなりつかれていたようで気持ちよさそうに寝息をたてた。

歩美「やっぱり、コナン君つかれてたのね」

光彦「まあこれでだいじょうぶでしょう」

名探偵の睡眠（後書き）

ああああああああああああ

復活した名探偵（前書き）

ああああああああああああ

復活した名探偵

コナン「ん？」

歩美「あ、コナン君おきちゃったんだね」

コナン「ん、ん〜んんん！！！（分かったから縄をほどけ！！！！）
」

哀「十分にねれたみたいね。だいぶ顔色もよくなったみたいだし。」

げんた「今なわほどいてやっからまってるよな！」

そういつとげんたがコナンの猿轡と縄をほどいた。

コナン「ぶはー。なにすんだよ！？このマッドサイエンティスト！！
」

哀「あら、また口をふさがれたいの？」

コナン「あ、いえ・・・すみません・・・」

哀「じゃあここから抜け出すあんでも考えてくれる？平成のホームズさん？」

コナン「へいへい・・・」

復活した名探偵（後書き）

ああああああああああああああああ

大阪の色黒探偵始動（前書き）

ああああああああああああああああああああ

ツ
ー
ツ
ー

大阪の色黒探偵始動（後書き）

ああああああああああああああああああああああああああああああ

最悪の再会（前書き）

さあいつてみよ〜w

最悪の再会

「そのころ蘭と園子」

蘭「どうしよ……コナン君……誘拐されちゃったって……この山でもないよ……私、私、どうしたらいいんだろう……園子!？」

蘭が突然目の前で崩れ落ちる親友をみてことばを失った。

蘭と園子は今、コナン達を小五郎や博士、和葉、平次、えりと手分けしてさがしていたのだった。

園子にかけようとした瞬間、頭に鈍い衝撃をかんじ、それから蘭も意識をうしなった。

そして二人は車につれさられていった。

「そのころ服部、和葉、博士」

服部「クソ、なんなんやこの人数!?! 3人相手に11人かいな!?!」

和葉「あ!?!?!?!?!」

和葉はそういつとたおれた。

そう、今、組織の構成員に服部たちは囲まれているのだ。

そのうちに博士や服部も気絶させられ、車ではこぼれていった。

くそのころえり、小五郎はく

えり「きゃあ!?!?!?!」

小五郎「えり!?!クソ!?!うあ!?!?!?!?!」

二人はしずかにつれさられていった。

くそのころコナン、哀、光彦、歩美、元太く

歩美と光彦、げんたはさっきいた部屋から移動させられ、地下の鉄格子張りの牢屋らしきところにつれていかれ、哀はさっきの部屋で、

A P T Xと、いろいろな分野の薬を作ること命じられ、一人さびしく、研究をすすめていた。

コナンは、歩美達が移動させられる前に歩美たちとは隣の牢にいれられ、拘束され動けない状態になっていた。幸い、歩美達とはただの鉄格子がはられているだけで、表情を認識することも、しゃべることもできていた。

しかしコナンはさつき連れて行かれるとき抵抗して、腕に弾を掠められ、2つ目の傷で、痛みにも必死にたえていた。

歩美「コナン君・・・大丈夫？」

コナン「ああ、大丈夫だよ、ハア・・・これくらい・・・一番・・・ハア辛いのは、一人研究させられてる、灰原なんだから・・・」

コナンがそっぴいおわったとき、小五郎やえり、蘭に園子、和葉と平次、博士が歩美達の牢に無理やりおしこまれてきた。

べつに7人は拘束されているわけではない。拳銃をつきつけられていたのだ。

服部「なにすんじゃいこのポケエ!!!!!!」

蘭「コ、コナン君、どうしたの!?!その怪我!?!」

蘭は鉄格子をもちながらいった。

そして蘭たちの鉄格子がしまると、組織の構成員にむりやり哀がおされるようにしてつれてこられた。

哀「貴方たち、怪我はないようね。」

哀は白い研究服をきて、とても悲しそうな顔をしていった。

研究員はポケットから薬をだした。

どうやら哀の開発したものらしい。

哀はそれを見て血相を変えて怒鳴った。

哀「ちよつとそれをどうするつもり!?!それは強力な麻痺を起こす薬よ!?!そんなの投与したら、どれだけその人が苦痛にうなされる

と思ってるの！？まさか貴方たち、それを人間に投与するつもりじゃないでしょうね！？私はモルモット実験のためにこの薬をつくったのよ！？やめなさい！！！！！！」

構成員はそんな哀に拳銃をむけると

構成員A「うるさい。黙っている。そこのガキ共人、こい。」

と低い声でいった。

歩美達は涙を目にいつぱいたため、ゆっくり、ゆっくりと構成員たちちにかずいた。

その周りでは、蘭たちの叫び声なりひびいていた。

哀も声がかれてしまいそうなくらいでさげんだ。

歩美達が構成員たちの前にくると、構成員たちは歩美達に薬を投与しようとした。

それをコナンの低い声の叫びがとめた。

コナン「ヤメロツ！！！！！！歩美達に手えだすんじゃない！！！！」

コナンの表情、目つきは7歳の子供ではなかった。

コナンの表情は、怒り狂ったときの新一その物だった。

全員がその表情、言葉、声に言葉をうしなった。

構成員までもおびえたほどだった。

その時構成員の無線がなった。

どうやらそれは上からの呼び出しだったようだ。

構成員たちは薬をしまいなおすと、コナンの牢からコナンをかかえ、哀をつれさるうとした。

そんな構成員に哀はいった。

哀「5分間、ここにいさせてくれない？この牢の鍵はカードだし。私もつてないから。それに江戸川君もいないんだし。いいでしょ？」

哀がそういつと構成員はむごんでうなずき、暴れるコナンを無理やりつれてでていった。

そこに哀たちだけになると、哀は下をむきながらしずかにいった。

哀「ねえ・・・、今から言うこと、貴方たちには、受け止められる・・・？」

最悪の再会（後書き）

お楽しみに・・・

正体ばれるとき(前書き)

ああああああああああ

正体ばれるとき

哀「ねえ、今から言うこと、貴方たちには受け止められる？」

一同「え？」

服部「ちょーまちなーちゃん！！工藤のことはあいつが自分でいうべきや！！！！」

哀「わかってるわ。だから工藤君のことはふせておく。私のことだけよ。」

あがさ「哀くん、本当にいいのかね！？」

哀「ええ。それと時間がないの。質問はあとにしてだまってきいてちょうだい。」

えり「その前に聞きたいことがあるんだけど、あなたがシエリーさん？」

歩美「え、うそ！？」

小五郎「ばかかお前！あんなガキが！？」

哀「そうよ。私は灰原哀なんかじゃないわ。シェリーよ。」

蘭「なんで・・・！？」

哀「もともと灰原哀なんてこの世に存在しないの。私がつくりあげた人物だから。もともと私は貴方たちをつれさった、組織の一員よ、コードネームはシェリー。本名は宮野志保。年齢も18歳。そこで、私は毒薬の研究をしていたの。そこで完成したのがaptx4869。体から毒が検出されないという代物。まあ試作品だけど。そのあと、組織にたった一人の身内の姉を殺され、組織に反抗した私は裏切り者として、監禁された。そのとき死のうと思つてのんだaptx4869の副作用で幼児化したの。それでわたしを小さなダッシュコートからにがしてくれたの。そこで行き先もなくとれていたわたしを博士がひろってくれて、今になるってわけよ。」

げんた「ま、まじかよ」

蘭「たった、一人の身内のお姉さんを・・・」

園子「どうして、そんな組織なんかに・・・」

哀「もともと両親がはいつていてね。それで生まれてときから。組織の命令で物心着く前に留学させられて。親ともあったことないわ早くにふたりとも死んじゃったし、組織の監視がひどくてあえなかった。ここの組織は裏切り者や邪魔者に容赦なく死の織細をあたえる。もともとapexも、人に投与するなんてしらなかったし。まあそのせいで何人もの人が命をおとしたでしょうけど。」

和葉「なんか、すごいつらい人生を歩んできたんやね。」

園子「でも驚いたあ。私やラン、和葉ちゃんと服部くんよりもひとつ年上だったなんてね。」

蘭「ねえ。哀ちゃん。さっきから工藤くん、っていつてたけどもしかして新一も哀ちゃんみたいに!？」

哀「それは工藤君本人から聞くのね。じゃあわたしはもういくから。ちゃんと食事ははこばれてくるから安心して。」

哀はそういうと階段をのぼっていった。

蘭はしばらく深刻な顔をしてしたをみていた。

そろそろ明け方。まったくみんなねていない。

そろそろ子供たちには限界だろうと思った蘭は、上着をぬいで、床にしき、子供たちをねかせた。

園子「あのめがねのがきんちょ、大丈夫かなあ」

和葉「うん。心配やね・・・」

服部「あいつなら大丈夫や。こっちもあいつがおらんうちに脱出方がかんがえとかな。」

和葉「そやね。警察たすけにきてくれるやろ！！！！」

えり「はたしてそうかしら・・・警察はほとんど手がかりをつかんでないんじゃない？あの誘拐犯の手際によさ、証拠をのこさないやりかた。くやしけど、なんも手がかりはのこっていないもの。」

えりがそういうとみんな悔しそうにしたをみる。

そのとき階段から足音がした。

子供達も目をさまし、起き上がって、階段のほうをみた。

階段からは構成員数名と、コナンがむりやりだきかかえておりてきた。

コナンの顔色はいたって悪かった。

蘭「コナンくん!!!!!!」

和葉「あんたら、コナン君をはなしい!!!!!!」

構成員はそんな発言を無視して蘭たちの隣の牢にはいり、コナンを縛ろうとした。

しかしコナンは持ち前のすばしっこさと運動神経のよさでとんだり足の間をすべったりしてうまく構成員のことをかわしていた。

もともと反射神経のいいコナンだ。

そう簡単にはやられない、というより、構成員たちにかっっていた。

他のメンバーもそれを驚きながらみている。

構成員b「やめろ！……うごくんじゃねえ！……！」

コナンが一瞬とまって声のしたほうを見ると、銃を頭におしつけられた歩美がいた。

歩美は半べそかいていた。

構成員b「おとなしくしろ！じゃないとこいつの頭、ぶちぬくぞ！……！」

コナンは一瞬構成員をにらむとあばれるのをやめて、構成員の前にもどっていった。

再びコナンを構成員はそばって壁に固定すると、構成員はでていった。

歩美はまた泣き叫ぶと、蘭にしがみついた。

和葉「びっくりしたあ。コナンくん、反射神経いいんやね。平次の

倍や。」

服部「なんやと！！！！て、コ、コナンくん？大丈夫なんか？」

コナン「ああ、だれかカッターとかはさみとか、ガラスの破片とかもってねーか？」

コナンはおちついた様子でいった。

そうするとげんたはにっこりしてポケットをさぐった。

げんた「あゝ俺、最近きれいなおちてるがらす集めてんだよ。今日もひとつひろったんだ。」

コナン「お、そのガラス、俺の手もとになげてくれ。」

コナンがそういうとげんたがうまくガラスをなげた。

コナンはそれで手先をきょうにつかっつて縄をほどいた。

コナン「ふう、なんとか縄はほどけたな。で、博士、なんか進展あ

「つたか？」

博士「あ、ああ。哀くんが自分の正体と、黒の組織のことを話したよ。」

「コナン」じゃあ、次は俺のばんか・・・もう半分ばれてると思うし。」

博士「そうじゃな。哀くんだってはなしたんじゃ。新一、ここでみんなにおしえてやりなさい。」

「コナン」ああ。」

その光景をみんな不思議そうにみていた。

「コナン」まず、俺は江戸川コナンじゃない、もともと江戸川コナンなんてこの世に存在しないんだ。」

歩美「え、じゃあまさかコナン君も・・・」

「コナン」ああ。俺は江戸川コナンこと工藤新一だ」

そのとき全員が目をみひらいた。

蘭「し、新一なの……？」

蘭は涙目でいった。

コナンは無言でうなずいた。

コナン「蘭とトロピカルランドにいったあの日、帰り際に怪しい取引をもくげきしたんだ。取引を見るのに夢中になっていた俺は背後から近づくと、もう一人の仲間に気づかなかった。そこでaptx4869をのまされ、目がさめたら体がちじんしていた。組織に俺が生きてることを知られると、また命がねらわれ、周りの人にも危害がおよぶ。だから、正体をかくして探偵をやってるらんの家に居候として、もぐりこんだ、ってわけ。」

歩美「じゃ、じゃあコナン君があ有名な高校生探偵の工藤新一！？」

コナン「ああ。事件はあがさ博士が発明した時計型麻醉銃でおつちやんを眠らせ、この蝶ネクタイ型変声機で推理をひろうしてたんだよ。」

園子「じゃああたしのも!？」

コナンは黙ってうなずいた。

蘭は一気に泣きだすと、鉄格子の間からできるだけ手をだしてコナンにだきついた。

蘭「えっぐあいたかったよお新一くえっぐ!!!」

コナン「ごめん・・・な・・・。」

みんな感動した様子だったが、小五郎だけは有名になったのが新におおかげだったということでもまらなそうな顔をしていた。

正体ばれるとき(後書き)

あああああああ

つ、ついに正体ばれちゃいましたあああ………!!

作戦会議（前書き）

ああああああああああああああああああああ

作戦会議

和葉「でも、これで一安心やね!!」

歩美「うん!!」

園子「東の名探偵工藤新一と」

蘭「にしの名探偵服部平次がいるんだもの!!」

げんた「スペシヨルコラボレーションだぜ!!」

歩美「え・・・」

光彦「げんた君、それをいうならスペシャルです・・・。」

げんた「あ、そお? / / /」

服部「んじゃ、俺らが案考えといたるから、お前らは寝とき。おもいついたらおこしたる。」

そういうと小五郎とえり以外はにっこりうなずいてすやすやねむりだした。

コナン「よし……。まずは灰原をどうするか、だよな……」

服部「ああ。あのねーちゃんがいる時に作戦はじめんといけんけど……」

コナン「ここはカードキーだしなうまくはいばらぬすんできてくねーかな。」

服部「そやな。武器になるもんも必要やで。」

コナン「ああ。とりあえずはいばらと連絡とれればいいんだけど。」

服部「あ、お前のあのバッチはどうや？」

コナン「おれは前誘拐されたときとられちゃったけど、歩美ちゃんたちなら……」

歩美「歩美、もってるよ！」

コナン「あ、歩美ちゃん、おきてたのか？それに光彦やげんたも」

げんた「おう、おれらはさっきちよつとねたからよ。」

光彦「僕はさっきコナン君たちが言ったことをメモしてます!!」

げんた「おれはそれを人数分に模写する係り。」

歩美「わたしは、コナン君たちが言った必要なものをさがすかかりよ!」

服部「ほお、やるやんけ。さすが工藤といただけあるわ」

コナン「じゃ、バッチかしてくれるか？」

歩美「うん。」

コナンは歩美の探偵団バッチで連絡をした。

灰原「こちら黒ずくめの女。」

コナン「おい・・・。」

灰原「あら江戸川君、なに、はやくしてくれる?。」

コナン「あ、ああ。あのさ、次おまえこっちにくるとき、カードキ
ーとぶきになるもんなんかもってきてほしいんだ。それとこっちき
たら俺たちだけになりてえんだけど。」

哀「いいわ。次そっちに行くのは12日後。それまでのんびりして
なさい。じゃあ」

哀はそういって、一方的にバツチの通話ボタンをきった。

コナン「OKだったよ。」

服部「そうか、そりゃよかった。あとは大胆に壁をお前のシューズ
で。」

コナン「OK。じゃあ俺回復のためにねるわ。」

服部「せやな。お休み」

作戦会議（後書き）

ああああああああああああああああ

しんじゆん(新書)

ああああああああああ

つらいつらい

次の日コナンははあはああらく息をあげていた。

朝は元気だったがまたつれていかれ、かえってきたらこの有様だ。

コナン「はあはあ・・・ケホツコホ・・・はあはあ」

荒い息をあげるコナンをみてみんな心配そうな目をむけていた。

服部「工藤、お前だいじょぶなんか？」

コナン「はあっはあっだ、いじょうぶ、はあっだよ、はあっ」

蘭「大丈夫なわけないでしょ！？そんなにいきをあげて。」

いまこの状況での最高の救いはわかれていた牢屋がひとつにまとまったこと。

コナンのほおは真っ赤にそまり、額からは汗がにじんでいた。

蘭「やだ、すごい熱!？」

歩美「コナン君、さっきなにされたの!？」

コナン「はあっ風邪を、はあっ引き起こす、くす、り・・・」

コナンはそこまでいうとそのまま気をうつしなつた。

A P T Xを一度問うよされた体になってから子供のころ風邪なんてめったにひかなかつたのにそれがひどくなつた。

そうなるとう出る熱も尋常ではないのだろう。

ましてやそれを無理やりひきだされたら。

蘭「新一っ新一!？」

コナンは荒い呼吸だつた。

えりがすぐに上着をぬいでコナンをそのうえにのせた。

みんな心配しているようであせっている。

小五郎も血相をかえてコナンの顔色をうかがっている。

コナンがまた目をつつすらあけた。

服部「ほんと自分、なにされたんや!？」

コナンはとぎれとぎれいつた。

コナン「はあっ風邪を、はあつくす、りで、おこ、されて、はあっ
ぱい、かる、のま、はあっされた、はあっ」

そついいおえたときコナンの体に激痛がおそつた。

コナン「ぐうっ!!はあっはあっ」

コナンが胸をおさえた。

息もさきほどよりかなり荒くなっている。

みんな大声でさげんだ。

コナン「（これは、もどる、ときの・・・）」

コナンは30分ほどその調子だった。

だがしばらくするとその痛みはじょじょにひいていった。

博士「風邪がひどいから、もう少しでもとの体にもどりそうじゃないんじや。ただ免疫ができているせいでもどれなかったんじやな？大丈夫か？新一。たく、ひどいことをするのぉ！！」

コナン「あ、ああ。な、なんとか・・・」

やっとすこしおちついたコナンがいった。

もともにもどるときの激痛はひどい。

コナンはかなりつかれていた。

蘭「新一、今日はもうねて？そうじゃないともうむりよ。」

コナン「あ、ああ、わりいけど、そう、するよ・・・」

コナンはそのままねてしまった。

博士「かわいそうに。もとにもどるときの激痛はひどいじゃろに。きつとつかれたんじゃろに、そつとしいてあげよう。」

小五郎「コナン……」

きさき「かわいそうね。蘭、しばらく新一君をみててあげなさい。」

蘭「うん……」

園子「がきんちよたちももつねたら?」

歩美「ううん。いいの。コナン君のときになるし寝られないもん……」

光彦「はい……。」

げんた「だよな……」

かずは「平次もねなあかんって。昨日結構おそかったんやろ?」

平次「ん、ああせやったな。んじゃねるとすつかい。」

コナンと平次はこうして夢の世界におちていった。

じじじじじじ(後書)

ああああああああああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458y/>

名探偵コナン最終回～蘭に俺の本当の声で本当の言葉で～

2011年12月11日19時48分発行